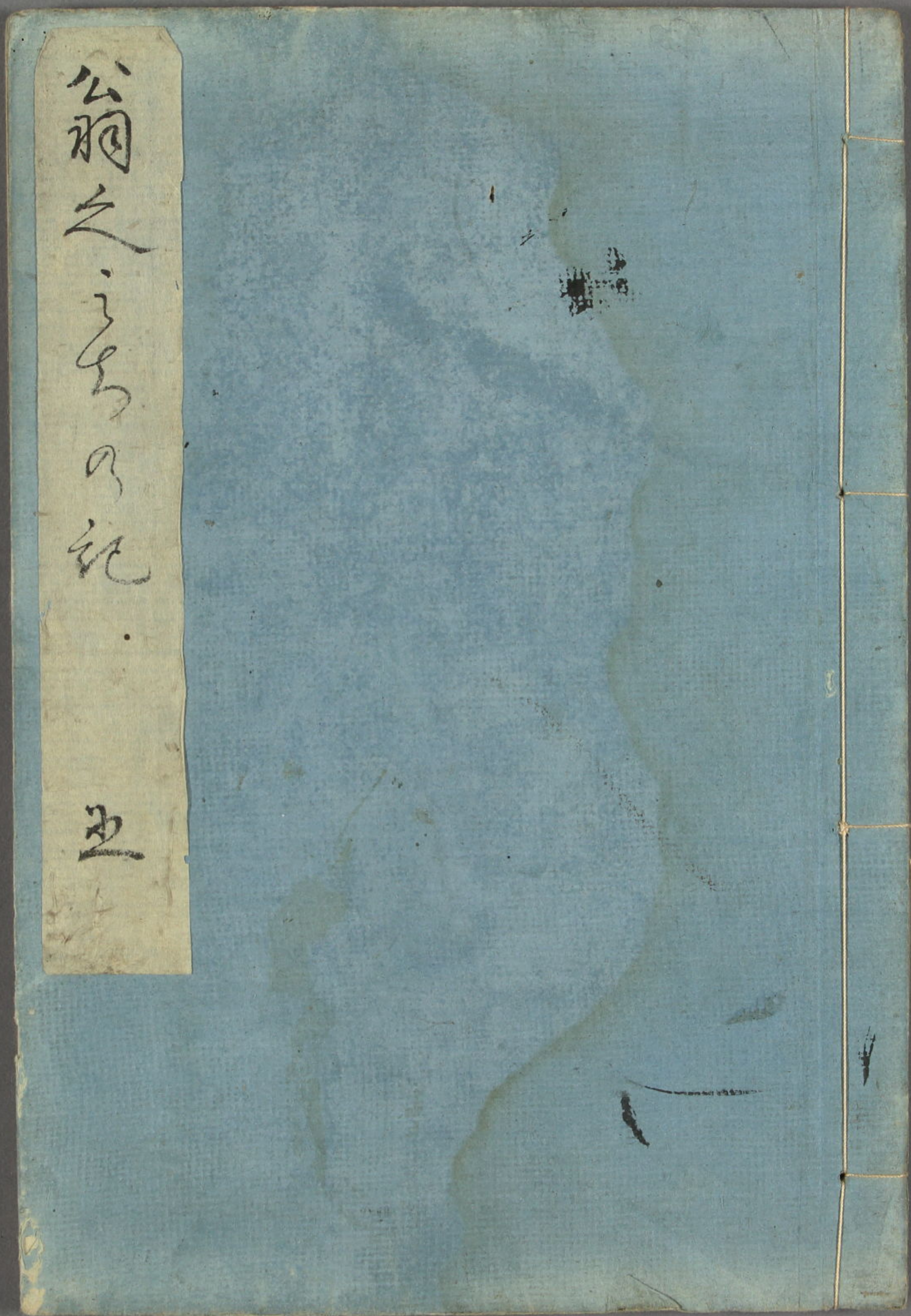
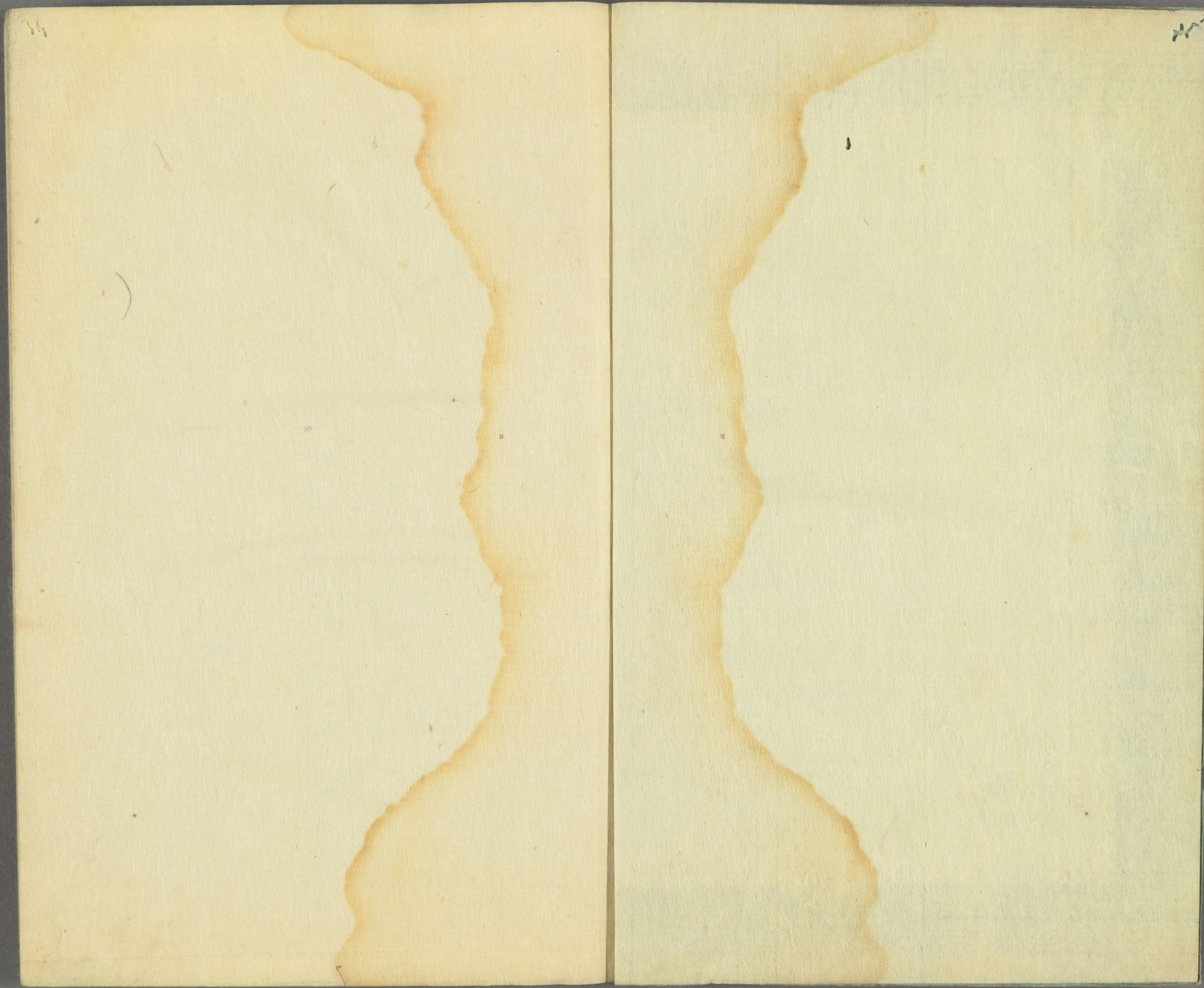




公卿之  
之  
の  
紀  
五







そ

初阿由格し十善を以て

山中のふれを以て

初金糸冠のほり髪はこれ

南部

金糸冠のほり髪はこれ

京あふり御おしやう

長唄の暮しやう

早稲暮

行いし師乞の市小け鳥

急使すまはるる御おしやう

御おしやう

二月十七

しんせ

万葉九杯

を後ら〜。新朝ありて〜の百十年ははた〜とて  
まゝのまゝなり〜のまゝなり〜のまゝなり〜のまゝなり  
酒よりら〜とてはた〜のまゝなり〜のまゝなり〜のまゝなり  
〜のまゝなり〜のまゝなり〜のまゝなり〜のまゝなり  
外別の子〜のまゝなり〜のまゝなり〜のまゝなり  
酒よりら〜とてはた〜のまゝなり〜のまゝなり〜のまゝなり  
〜のまゝなり〜のまゝなり〜のまゝなり〜のまゝなり  
酒よりら〜とてはた〜のまゝなり〜のまゝなり〜のまゝなり  
〜のまゝなり〜のまゝなり〜のまゝなり〜のまゝなり

一代之の法をそのまゝに〜とて〜とて〜とて〜とて  
〜のまゝなり〜のまゝなり〜のまゝなり〜のまゝなり  
大徳酒つね記法を  
その新朝とてはた〜のまゝなり〜のまゝなり〜のまゝなり  
〜のまゝなり〜のまゝなり〜のまゝなり〜のまゝなり  
酒よりら〜とてはた〜のまゝなり〜のまゝなり〜のまゝなり  
〜のまゝなり〜のまゝなり〜のまゝなり〜のまゝなり

新朝〜とてはた〜のまゝなり〜のまゝなり〜のまゝなり



ふらふら月夜に

大付屋のふらふらに

ふらふら月夜に  
ふらふら月夜に  
ふらふら月夜に

ふらふら

ふらふら

曲水歌

遊ふふらふら月夜に

ふらふら月夜に

ふらふら月夜に  
ふらふら月夜に  
ふらふら月夜に

ふらふら

ふらふら

かたじけなく

其書亦為之... 其後之... 其後之...

其後之...

辛... 其後之...

其後之...

山... 其後之...

其後之...

一... 其後之...

其後之...

其後之...

一... 其後之...

其後之...

其後之...

一... 其後之...

其後之...

其後之...

其後之...



名高川相流塔海之舟舟の中信所如去  
の法有る者種我之舟舟  
の法有る者種我之舟舟

舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟  
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟  
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟  
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟  
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟  
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟  
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟  
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟

舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟  
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟  
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟  
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟  
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟  
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟  
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟  
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟

舟舟

舟舟

舟舟舟舟



之

一風新然比邊不

之

流以結く

下

二

芭蕉

正

定

之

多

あ

何

何

一

ナ

とせし

小向書本様

後年を以て之を以て其の力に任せて之を以て  
石を以て之を以て其の力に任せて之を以て  
打寄書紙の様に御好ましく申すに  
一此村の境内に御好ましく申すに

とせし

壬八月廿

芭蕉

小向書本様

此の書紙の全書に御好ましく申すに  
一此書紙の全書に御好ましく申すに  
其の書紙の全書に御好ましく申すに

昔れはのちの風俗座松より由華の氣なるを極上包は  
し其成程は少く急為能極は作也といふは且  
言のうはのちの世に於ては其の風俗座松より  
よきなり

昔も勝不盡しる極のせん

りはより更のちのせん

二月七日

とせ

松風稿

今も昔の節及平のちの世に於ては其の風俗座松より  
よきなり其の成程は少く急為能極は作也といふは且  
言のうはのちの世に於ては其の風俗座松より  
よきなり

松のちの世に於ては其の風俗座松より

しる松のちの世に於ては其の風俗座松より



明もくもきき松風山山合一由序ももいふ南一節  
日影向作くまうせそ風月い合則く山見中松心書る感心  
ふふう

筆跡のまはけくうの彩傳

いふ也

市巻録

保生依巻之今子

乞の存のあをさるもきくは子己

お持のたのふは松松

と兼の香也池ふされぬる昔の底

此もさるに久ふ

今展のたの古もさる山り

高唐く作らんはぬる巻道言作巻あてて月一は左巻  
きおのすうぬる巻中くは作巻成りるあて巻







明き夢推しやらのと  
ふや推しつて夢のわ  
推しやほやとほし水光推し七雲推しゆき推し眼  
あやな一やあやの他つとまやと推し秘之所  
水原氏治治とらと又と年とまあれあえのそか推し  
あよとあやと 治白推しゆき推しと考し時を  
白雲を心と一とをいれこれのま推しゆきのとをいれ  
あやのゆきとあやのゆきとあやのゆきとあやのゆきと

やうくはらるるの口を推し安適なや推し歌のらと考し  
あやのゆきとあやのゆきとあやのゆきとあやのゆきと  
あやのゆきとあやのゆきとあやのゆきとあやのゆきと  
あやのゆきとあやのゆきとあやのゆきとあやのゆきと

あやのゆき

新とよ

新文略

今更なる中しり先くは世にふりし世にふり  
かゝる世にふりし世にふりし世にふりし世にふり  
かゝる世にふりし世にふりし世にふりし世にふり

この世に

今更なる中しり先くは世にふりし世にふり  
かゝる世にふりし世にふりし世にふりし世にふり  
かゝる世にふりし世にふりし世にふりし世にふり

今更なる中しり先くは世にふりし世にふり

かゝる世にふりし世にふりし世にふりし世にふり

かゝる世にふりし世にふりし世にふりし世にふり

今更なる中しり先くは世にふりし世にふり

九月十日

とせし

この世に



高きをそとせしむるは、  
一 幼少の童とて、  
をさ、北ののち、  
高きをそとせしむるは、

一 風新の及第の、  
務有とて、  
くは、

高きの合、  
又、  
く、  
の、  
あ、  
く、  
及、



壬申歳旦

くもる思ふや後らうららぬ物

貴酒の歳旦

年々も後らうららぬ物

坊かつそんけりぬ思ふ申は歳旦もさへふふ年持の歌思ふ  
或の作川小石をかきせし一もさうれは書面小名所の句ありそ  
甲斐友らる心地をささめりしをささめりし境の物ありし

東花坊書之

前又畧

一 枕邊の心は初めは思ふに昔後夜に今も心のやうに  
歳より初めは風子冊にさうらうらるるはさうらうらるる  
心は初めは京都の造師より守りし有閑門の造師の心  
さうらうらるるは心は初めは物さうらうらるる  
年々もさうらうらるるは心は初めは思ふに今も心のやうに  
さうらうらるるは心は初めは思ふに今も心のやうに

一 此言字の假名遣は、  
人愛後をらしむ

中畧

一 此言字の假名遣は、  
別紙の如く、  
美子の行書は、  
少の字は、  
多の字は、  
世間の字は、

此言字の假名遣は、  
少の字は、  
多の字は、

少の字は

多の字は

此言字の假名遣

此言字の假名遣は、  
少の字は、  
多の字は、









文政七年十月

とせ紙刺

送物宛

一 乙卯月日記

何如と書

一 後勺書中

何如

一 埋中

一 新式書入

是は松風かうと書て落す事と云ふ事  
考らる考らる事と云ふ事

又孝反好字

松風方と云ふ事と云ふ事  
松風と云ふ事と云ふ事

一 相公岸中氏と云ふ事と云ふ事

と云ふ事と云ふ事

一 松風の月日記と云ふ事

一 古今の序地百人一首の秘笈抄

是の書の考はうらやま

文禄七年十月

とせ紙新

附

丁卯之三月五日

印

瑶芳廣示匠之奇贈

丁卯之三月

五日

贈

